

姿消した植物 かいぼりで復活

池で「川の氾濫」再現 泥中に眠る種が覚醒

絶滅したと思われる水生植物が、数十年ぶりに見つかる――。池の水を抜いて環境を整備する「かいぼり」によって、泥の中で眠っていた種子が目覚める例が相次いでいる。環境悪化で姿を消した水辺の植物が、川の氾濫を人工的に再現したことで復活したらしい。ただ、種も、泥の中でいつまでも生きていられるわけではなく、残された時間は少なくなっている。

かった水をすべて抜いた。ブラックバスやアメリカザリガニなど外来種を駆除し、5カ月ほど池干しをする間に周りの樹木にも手を入れ、池に明るい日が差すようにした。

すると、20年6月、園の自然館に持ち帰った泥から、都内では絶滅したとされていたジュンサイが生えていたのが6年ぶりに見つかった。池の底にたまって

1を見直した。内野秀重園長は「何か出て来たらいいねと話していたが、まさかここまで成果があると」と驚いた。パークレンジャーの片山敦さんは「在来の魚や昆虫も生き残っていて、池のポテンシャル（潜在能力）を感じた」と喜ぶ。



かいぼりをすると、なぜ水生植物が復活するのか。

東京都三鷹市と武蔵野市にまたがる都立井の頭公園。井の頭池はかつて、水質汚染が問題になった時期もあったが、2013年度からかいぼりを続け、都のレッドリストで絶滅危惧種とされていた水生植物のツツイトモが復活。59年ぶりにイノカシラフラスコモも発見された。池の水は透き通って光が差し込むようになり、美しい緑が群生する姿は画家クロード・モネの絵のようだと話題になった。

八王子市の長池公園も19年秋から、開園以来初めて池のかいぼりをした。環境再生活動に取り組むNPO法人「生態工房」や近くの大学、地域の人が協力。一度も抜いたことがな

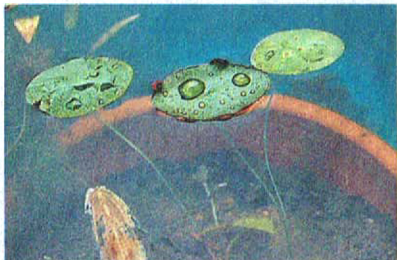
かった。川はもともと、降雨の多い時期に氾濫を繰り返してきた。氾濫すると、川の周りには池ができる。やがて落ち葉や泥がたまったり、干上がった草地になっ

た。日本では農業用に整備されたものの使われなくなったため池や、手入れされなくなった公園の池が少なくない。高度経済成長期の1960〜70年ごろ以降に手付かずとなった池が多いとみられる。

かいぼりで水が透き通り、ツツイトモが群生するようになった井の頭池＝2019年6月、東京都三鷹市、高橋雄大撮影



長池公園のかいぼりで外来魚などを捕獲する参加者ら＝2019年11月、NPOフュージョン長池提供



長池の底にたまっていた泥から復活したジュンサイ＝2020年10月



かいぼりで整備した長池の浅場に密生するミズユキノシタ＝いずれも東京都八王子市

「生態工房」の佐藤方博事務局長は「水没と干上がりを繰り返すことで、自然がしていた水辺のプロセスを人工的に再現していた。かいぼりが行われなくなり、外来種の持ち込みなどもあって、池の環境は水生植物にとってくらしにくくなっていた。

「生態工房」の佐藤方博事務局長は「水没と干上がりを繰り返すことで、自然がしていた水辺のプロセスを人工的に再現していた。かいぼりが行われなくなり、外来種の持ち込みなどもあって、池の環境は水生植物にとってくらしにくくなっていた。



ただ、泥に埋まった種にも復活できる限界があるという。国立環境研究所の西広淳・気候変動適応センター室長（植物生態学）らが茨城県霞ヶ浦などで調べたところ、植物の種類や埋まった条件によって変わるものの、その植物が姿を消してから再生できる割合は20年で約50%、40年では約10%にまで下がった。